



Title	比喩が介在した“N1 のN2”型名詞句について
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	語文. 2020, 115, p. 102-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

比喩が介在した“N1のN2”型名詞句について

大 田 垣 仁

1. はじめに

ふたつの名詞が助詞「の」で連結された名詞句がある（以下これを、「“N1のN2”型名詞句」とよぶ）。この形式は単純ながら、さまざまな意味解釈が可能で、なんらかの類型や規則性をみいだそうとする研究の蓄積がある（鈴木 1978・1979a-c・2006、益岡・田窪 1992、西山 2003・2013、日本語記述文法研究会 2009）。一方、三宅（2011）は主要部の観点からこの名詞句の統語的な類型化をこころみた。本稿はこのタイプの名詞句に比喩が介在したばあい、名詞句の構造にどのような影響をあたえ、名詞句の解釈や指示対象の限定がどのようにおこなわれるかについて分析する。分析の出発点になるのは隠喩表現が直喩表現の単なる省略や、語の置換ではないことをしめすために、佐藤（1978）があげたつぎの例である。

- （1）顔をしかめたのは介添の青二才だけであつた。葦名の目の色がかすかにうごいて、笑のさざなみをふくんだやうであつた。（石川淳『野守鏡』）

この例について佐藤（1978）はつぎのような問題提起をおこなっている。

- （2）「笑のさざなみ」とは何であろうか。（……）／葦名という青年は、何やら謎めていて、いささかうさんくさく颯爽とした男であった。つれの子分風の若いやつは彼を先生とか社長とか呼んでいる（……）。その葦名が、ある日、紹介されて成金大富豪の伊上のやしきへ乗り込んで来た。商談と、ついでにその家の娘に結婚を申し込み、である。その令嬢というのが、なかなか小なまいきで、会った途端、返事に困るような突飛なあいさつをする。つきそいの若いほうは、顔をしかめるだけだった。／が、葦名の顔は平然としていた。葦名は笑ったわけではない。ただ、目のなかに「笑のさざなみ」がかすかに動いた。……私たちはこの隠喩をじゅうぶんに理解することができる。しかし、その「さざなみ」が何であるかを説明しろと言われれば、答えあぐねるだろう。すなわち、この隠喩は、XのかわりにYと言っているのではない。Xという適切な名称があるのなら、わざわざY（さざなみ）などと言いかえるにはおよぶまい。

（佐藤 1978：94-5）

この例もふくめ、比喩が介在した“N1のN2”型名詞句の正体について、三宅(2011)による統語的な分析を基盤とした類型化をおこない、メンタル・スペース理論(Fauconier 1985, 1997)の観点から類型の定式化をおこなう。つづく第2節でこのタイプの名詞句について記述的な観察をおこなう。第3節でこのタイプの名詞句についてあつかった先行研究について整理する。また、本稿の理論的な基盤となるメンタル・スペース理論による名詞句指示の把握について整理する。第4節で第2節で提示した例を第3節でしめした道具だてをもちいて分析する。第5節は全体のまとめである。

2. 言語現象の観察

ここでは“N1のN2”型名詞句においてN1またはN2のいずれかに比喩的属性(i.e. 隠喩属性・提喩属性・換喩属性)があらわれていると考えられる例を整理する。隠喩属性とは、類似関係にもとづいて対象を叙述したり指示したりするのためにもちいられる属性である。提喩属性とは、プロトタイプカテゴリーが介在したカテゴリーの包摂関係にもとづいて対象を叙述したり指示したりするために用いられる属性である。換喩属性とは、事物の隣(近)接関係にもとづいて、対象を指示するために用いられる属性である。

2.1. 隠喩属性がふくまれるもの

まず、N1またはN2のいずれかが隠喩属性として使用されている例をあげる。

- (3) a. フジヤマのトビウオ (=名詞句全体で、伝説的な水泳選手である「古橋廣之進」を指示している)
- b. 氷上の格闘技 (=名詞句全体で「アイスホッケー」を意味している)
- c. 笑のさざなみ (=名詞句全体で「葦名」の表情を形容している)
- d. 森のバター (=名詞句全体で「アボカド」を意味している)
- e. 海のミルク (=名詞句全体で「牡蠣」を意味している)
- f. 人生の旅 (=名詞句全体で人生を「旅」に喩えている)
- g. 蒸し風呂の暑さ (=名詞句全体で体感気温を「蒸し風呂」に喩えている)
- h. 怪物の松井 (=名詞句全体で元プロ野球選手の松井秀喜を「怪物」に喩えている)
- i. ゴッドファーザーの息子 (=「ゴッドファーザー」は本来、宗教における「代父」を意味していたが、隠喩による転義で「マフィアのボス」を意味するようになっている。ここではさらに手塚治虫の漫画『紙の砦』にでて

くるガキ大将「明石」の父親でやくざの親分である人物を指示している)

j. ママの重 (=「怒鳴り (声)」を下線部の名詞「雷」に喩えている)

これらの例には、名詞句全体で新たな対象を意味したり指示したりするものと、名詞単独であらたな対象を指示するものがある。

2.2. 提喩属性がふくまれるもの

つぎに、N1 または N2 のいずれかが提喩属性として使用されている例をあげる。

(4) a. 浪速のモーツァルト (=名詞句全体で作曲家「キダタロー」を指示している)

b. 紀州のドンファン (=名詞句全体で資産家の「野崎幸助」を指示している)

c. 1986 年のマリリン (=名詞句全体で歌手の「本田美奈子」を指示している)

d. 令和のキャッツアイ (=名詞句全体で新宿歌舞伎町のホストから多額の現金を盗んだ女性 2 人を指示している)

e. 下町のナポレオン (=名詞句全体で麦焼酎「いいちこ」を指示している)

f. 東洋のカスバ (=名詞句全体で香港にあった「九龍城砦」を指示している)

これらの例は、N2 にくる名詞に提喩が生じることで、名詞句全体として何らかの別の対象を指示している。提喩のタイプとしては、固有名詞が普通名詞化する現象で、N1 によって導入される属性によって普通名詞化した N2 の指示対象が限定される。また、上記以外にも「引越しの日通」のような N1 と N2 のあいだに提喩的な関係がかかわるものがある。

2.3. 換喩属性がふくまれるもの

最後に、N1 または N2 のいずれかが換喩属性として使用されている例をあげる。

(5) a. メガネ (=メガネをかけた人物) の弟

b. 刑事の髭 (=髭をはやした人物)

c. フジヤマ (=日本) のトビウオ (= (3a) 再掲)

これらの例は、N1 または N2 のどちらか一方が換喩属性としてはたらき、本来の指示対象とはことなる対象を指示する。N2 の指示対象を限定するために使用されたり、名詞句の主要部として使用されている。

3. 分析の道具だて

ここでは比喩が介在した“N1 の N2”型名詞句を分析するための道具だてとして、“N1 の N2”型名詞句についてあつかった先行研究について整理する。また、比喩もふくめた名詞句指示のメカニズムを定式化するために、メンタル・スペース理論に

よる名詞句指示の原理について整理する。

3.1. “N1のN2”型名詞句の類型

まず、“N1のN2”型名詞句の構造を分析するための道具だてを整理する。4節であらためて説明するが、比喩の介在を視野にいれるばあい、2つの名詞の意味的な関係だけでなく統語的な関係についての吟味が必要となる。2つの名詞の統語的な関係については三宅（2011）が主要部の観点から「主要部後置型」「主要部同格型」「主要部倒置型」という3類型を提案している。また、益岡・田窪（1992）は2つの名詞を連結する助詞「の」の統語的なちがいについて指摘している。以上の統語的な類型化をふまえたうえで、三宅（2011）のいう「主要部後置型」における2つの名詞の意味的な関係について益岡・田窪（1992）、西山（2003、2013）の研究について整理する。

3.1.1. 統語的観点にもとづく類型

三宅（2011）は、2つの名詞が連体助詞「の」で結合された名詞句（三宅はこれを“XのY”と呼ぶ）を統語的な性質の違いから、主要部後置型、主要部同格型、主要部倒置型の3つに区別した。

- （6）a. 主要部後置型：かぼちゃの花、パイナップルの木、大阪の町並み、太郎のカバン、etc.
- b. 主要部同格型：チューリップの花、松の木、東京の町、太郎のおにいちゃん、三宅の奴、etc.
- c. 主要部倒置型：シェークのパニラ、にぎりの特上、カローラの1500cc、etc.

三宅（2011：81-4）によると、まず、「主要部後置型」とは「意味的にはたしかに様々であっても、“XのY”という構造において、Yが主要部であるという共通性は有して」おり、「文脈上、主要部は省略することができる（ゼロの代名詞で置換可能）と言える」ものである。つぎに、「主要部同格型」とは、一般的にいわれる「の」を「である」におきかえられるような「同格」をさすものではなく、「Yが主要部性を持っていない。Xに内在する性格をYで明示する」「XとYの間に修飾関係があるかどうか、言い換えると、どちらが主要部かという点に関して、はっきりしない」「“XのY”が全体で1つの語であるともいえる」ものである。主要部同格型は文脈上主要部を省略できない点で主要部後置型と統語的な違いがある。つぎに、「主要部倒置型」とは「統語的にどのような操作がなされることなのかということについては、ここでは不問」としながらも、「日本語の大原則である「主要部後置」に違反す

る主要部前置ではなく、ある条件下で主要部が倒置されたものとみなすべき」ものをいう。「Xの方が主要部でYはその修飾要素であるように思われ」「必ず、(……) XとYを入れ替えても等価な意味関係を表す」ものである。

以上の定義をふまえると「主要部後置型」「主要部同格型」「主要部倒置型」の区別はつぎのようなテストフレームとして整理できる。まず、「空所つき対比テスト」(と便宜的によぶ)をおこなうことで、主要部後置型か否かが判別できる。

- (7) a. 主要部後置型：大阪の町並は好きだが、東京のφは嫌いだ
- b. 非主要部後置型：*大阪の町は好きだが、東京のφは嫌いだ
- c. 非主要部後置型：*シェークのバニラは嫌いだが、ソフトクリームのφは好きだ。

つぎに、非主要部後置型に「倒置テスト」をおこなうことで、主要部同格型か主要部倒置型かを判別できる。

- (8) a. 主要部同格型：⁽¹⁾東京の町／*町の東京
- b. 主要部倒置型：シェークのバニラ／バニラのシェーク

ところで、三宅(2011)の「主要部後置型」は、益岡・田窪(1992)にしたがえば2つの類型にわかれる。1つは名詞を連結する「の」が助詞になるもので、さらに「N1がN2を限定修飾するもの」と「N1がN2の補足語になるもの」にわかれる。

- (9) 「名詞1 + 「の」 + 名詞2」は、「名詞1 + 「の」」が、名詞2を限定修飾する場合と、名詞2の補足語として働く場合とがある。／補足語として働く場合というのは、「客の到着(客が到着すること)」、「鈴木さんの古代語の研究(鈴木さんが古代語を研究すること)」のように格関係(具体的にはガ格とヲ格)を表すものである。

(益岡・田窪 1992 : 159-60)

もう1つは、いわゆる「同格」で「の」が判定詞「だ」の連体形となるものである。

- (10) 判定詞「だ」の連体形は「の」であり、名詞と名詞を接続する助詞である「の」(……)と形が同じになる。「太郎の本」や「花子の到着」のような表現における「の」は助詞の「の」であるが、(……)判定詞の連体形の場合は、「である」、「であった」、「だった」、等と交替できる。

(益岡・田窪 1992 : 26)

この類型の例はつぎのようなものである。

- (11) a. 私が子ども {の／であった／だった} 頃
- b. 英文学者で作家 {の／である} A氏

(益岡・田窪 1992 : 26)

3.1.2. 意味的観点にもとづく類型

三宅（2011）のいう「主要部後置型」の“N1のN2”型名詞句には、2つの名詞の多様な意味関係をとらえようとする研究の蓄積がある。この種の研究には、2つの名詞の意味関係を網羅的に記述しようとした鈴木（1978、1979a-c、2006）の一連の研究と、意味関係をいくつかの類型におさめようとするもの（益岡・田窪 1992、西山 2003・2013、日本語記述文法研究会 2009）がある。本稿では後者のタイプの研究に注目する。これらを時系列で概観すると、まず益岡・田窪（1992）はつぎのような分類を提案している。

- (12) 「名詞 1 + 「の」 + 名詞 2」は、「名詞 1 + 「の」」が、名詞 2 を限定修飾する場合と、名詞 2 の補足語として働く場合とがある。／限定修飾の具体的な意味としては、「私の本」のような所有関係、「テーブルの足」のような全体・部分の関係、「明日の朝刊」のような時間的限定、「駅の電話」のような場所的限定、「煉瓦の家」のような材料の限定、「バラの花」のような種類の限定、「文法の話」のような内容の限定、等さまざまなものがある。

（益岡・田窪 1992：159-60）

日本語記述文法研究会（2009）もこれに類似したかたちで、「修飾名詞が被修飾名詞の所属先や性質、基準点を表す」という分類を提案している。

- (13) a. 所属先：所有者（私の家）、部分に対する全体（ウサギの耳）、所属（部署の責任者）、場所（北海道の叔父）／修飾名詞が何らかの事態（方法、手段、原因、理由、目的）を表し、被修飾名詞がその事態を成り立たせる要素や、事態の産物を表すといった関係の名詞修飾もある。
- b. 性質：修飾名詞が被修飾名詞の広い意味での性質を表す名詞修飾がある。修飾名詞の被修飾名詞に対する関係には、性質、内容、種類、材料、外観の特徴といったものがある。
- c. 基準点：修飾名詞が空間に存在する事物あるいは時間軸上に生起する出来事を表し、被修飾名詞がそれらの事物や出来事を基準点とした空間的位置や時間的關係を表す名詞修飾がある。

（日本語記述文法研究会 2009：107）

この種の研究を発展させたものに西山（2003、2013）がある。まず西山（2003）は、西山が「NP1のNP2」形式と呼ぶ名詞句が、これらのあいだにある意味的緊張関係から、以下の5つのタイプに区別されることを主張した。この研究の特色は、2つの名詞の意味関係を網羅的に記述しようとしたばあいには生じる多様な解釈をタイプAで処理したうえで、なんらかの規則性をもつ他のタイプを指示的名詞句 / 非指示

的名詞句（叙述名詞句・変項名詞句）、飽和名詞/非飽和名詞といった理論的装置を軸に類型化した点にある。

- (14) a. タイプA：NP1と関係Rを有するNP2（例：山田先生の本、洋子の首飾り、ピアノの音）
b. タイプB：NP1 デアルNP2（例：コレラ患者の学生、看護婦の洋子、病気の父）
c. タイプC：時間領域NP1における、NP2の指示対象の断片の固定（例：着物を着た時の母、大正末期の東京）
d. タイプD：非飽和名詞NP2とそのパラメータの値NP1（例：この芝居の主演、太郎の妹、この小説の作者）
e. タイプE：行為名詞NP2と項NP1（例：物理学の研究、この町の破壊、田中先生の忠告）

（西山 2003：6-58）

さらに、西山（2013）ではこれらの分析を発展させ、「タイプF」「ウナギ文からの派生」「メルクマール」という類型を提案している。

- (15) a. タイプF：譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1（例：太郎の手、象の鼻、家の玄関、車のハンドル、鍋の蓋）
b. ウナ重の客：いわゆるウナギ文、つまり「（あの）お客さんはうな重です」から派生した名詞句。
c. オペラのモーツァルト：NP1（メルクマール）のNP2（指示的名詞句）という構成をもつウナギ文的性格を色濃く反映したタイプAの非制限的用法の表現。

（西山 2013：7-9）

3.2. メンタル・スペース理論からみた名詞句指示と比喻の原理

つぎに、“N1のN2”型名詞句による指示のメカニズムを定式化するための道具立てとしてメンタル・スペース理論（Fauconnier 1985, 1997）を導入する。メンタル・スペース理論では、名詞句による対象の指示を役割関数としてとらえる。役割関数は役割・スペース・値から構成される。「役割」とは、内包をもったカテゴリーである。「スペース」とは、場所、時間、信念、一般的知識（＝総称スペース）などのパラメーターで、役割に代入されることで、名詞句の指示対象である「値」を限定する。この関係を定式化するとつぎのようになる。

$$(16) \text{r (M)} = \text{v} \quad [\text{r: 役割, M: スペース, v: 値}]$$

「大統領」という名詞を例にとると、「2020年当時のアメリカにおける大統領」はつぎのように表示することができる（図 1 も参照）。

(17) 大統領 (2020年, アメリカ) = ドナルド・トランプ

役割関数による名詞句指示の原理をもとにすると、名詞句に生じる比喩は、役割関数を語用論的コネクターによるアクセス原理によって拡張したものとしてとらえることができる。アクセス原理とは、Nunberg (1978) が導入した語用論的関数という概念をメンタル・スペース理論に援用したもので、Fauconnier (1997) によれば、つぎのように定義される。

(18) 2つの要素aとbがコネクターFによってリンクされていれば($b=F(a)$)、要素bはその対応物aの名前か記述か指さしかにより同定できる。(Fauconnier 1997:41 を翻訳)

本稿では、比喩が介在した“N1のN2”型名詞句の構造を分析したうえで、この理論装置をつかった定式化をおこなう。

4. 分析

ここからは、第2節で提示した比喩が介在した“N1のN2”型名詞句について、第3節で整理した道具だてをもとに、名詞句の統語的または意味的な構造や、名詞句解釈や指示対象の限定にさいしておこなわれる認知操作について分析をおこなう。対象となる比喩は、隠喩・提喩・換喩および、それらが複合して生じるものである。3種の比喩について、「N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に比喩が生じるもの」「パラメーターつきの比喩」「N1 と N2 が比喩の関係をメタ的にしめすもの」という類型をしめす。さらに、複数の比喩が複合して生じる例について分析する。最後に、以上の類型がおこなう認知操作をアクセス原理によって定式化する。

4.1. N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に比喩が生じるもの

この類型は、名詞句内のある名詞がもう一方の名詞と無関係に比喩表現になるものである。この類型では、語用論的コネクターによって当該の名詞の指示対象が本来のものから別のものにかわる。また、語用論的コネクターによる指示の拡張をきっかけにあらたなカテゴリー化がおこり、名詞の語彙的な意味として比喩由来の意味が定着した名詞も使用される。

4.1.1. N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に隠喩が生じるもの

まず、N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に隠喩が生じるものについて

のべる。この類型に該当する例としてつぎのようなものをあげることができる。

(19) a. ゴッドファーザー (=やくざの親分) の息子

b. {ママ、パパ、先生} の雷

このタイプの名詞は、隠喩の語用論的コネクターによって指示対象がかわったり、そこからカテゴリー化が完了して語として定着したものである。このタイプの名詞は例に示したように、N1の位置にもN2の位置にもきうる。このタイプは、統語的にはN1は主要部後置型名詞句の補部でありN2は主要部となる。また、意味的には限定修飾の関係である。主要部になるもののみ、以下でテストしておく。

(20) ママの雷は怖いが、パパのφはあまり怖くない。

4.1.2. N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に提喩が生じるもの

つぎに、N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に提喩が生じるものについてべる。この類型に該当する例としてつぎのようなものをあげることができる。この例では、提喩に由来する意味の限定が名詞の語彙の意味 (i.e. 〈病気などによって平常よりも高くなった体温〉) として定着しているものである。

(21) 熱の華／息子の熱

この類型は統語的にN1が主要部後置型名詞句の補部でありN2が主要部となる。

(22) 息子の熱はさがったが、娘のφがまださがらない。

4.1.3. N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に換喩が生じるもの

最後に、N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に換喩が生じるものについてべる。この類型に該当する例としてつぎのようなものをあげることができる。

(23) メガネ (=メガネをかけた人物) の弟／刑事の髭 (=髭をはやした人物)

これらの例は、N1 または N2 の位置に他方の名詞とは無関係に換喩が生じている例である。このタイプはつぎのテストからわかるように統語的には主要部後置型である。

(24) メガネの弟はかしこいが、髭のφはできがわるい。

4.2. パラメーターつきの比喩

この類型は、N1 が名詞句全体の指示対象に関連するパラメーターをあらわし、N2 を限定修飾するものである。N1 と N2 がカテゴリーの包摂関係にならないのが、パラメーター属性の特徴である。パラメーターには以下のようなバリエーションがある。

(25) a. 〈場所〉：森のバター／浪速のモーツァルト

- b. 〈時間〉：1986年のマリン／21世紀の石原裕次郎
- c. 〈序数〉：第2の広島
- d. 〈信念〉：自分の相撲（＝自分にとっての）、
- e. 〈年齢〉：お年寄りの原宿、大人の事情、ガキの使い
- f. 〈性別〉：男の隠れ家、女の園

このタイプの“N1のN2”型名詞句は、「牡蠣は海のミルクである」「キダタローは浪速のモーツァルトである」のように、

- (26) N3 〈名詞句全体の指示対象をあらわす名詞〉 は N1 〈名詞句全体の指示対象に関連するパラメーター〉 の N2 〈比喩をあらわすカテゴリー〉 である。

という構造の文をつくることができる。

4.2.1. パラメーターつきの隠喩

まず、パラメーターつきの隠喩についておのべる。この類型は、目標領域に属するカテゴリーのフレーム情報に関連するパラメーターとしてN1が場所名詞をとり、起点領域に属するカテゴリーをあらわすN2を限定修飾することで名詞句が飽和し、名詞句全体で目標領域に属し、起点領域のカテゴリーの内包がもつ属性を部分的に保持するカテゴリーをあらわす。

- (27) 海のミルク／森のバター／氷上の格闘技／都会のオアシス、etc.

ここでいう目標領域、起点領域という概念は、概念メタファー理論（Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987）にもとづく用語である。この理論では起点領域から目標領域への属性の部分的写像（e.g. 旅→人生）がおこなわれることが隠喩の認知的動機づけであると考ええる。また、隠喩のばあいN1があらわすパラメーターは、場所名詞をとることが典型的であると考えられるが、それ以外にも「ガキの使い、男の隠れ家、女の園」のようなものもパラメーターつきの隠喩であろう。この類型は、三宅（2011）がしめした統語的な3分類のどれにも属さず、名詞句が分析不可能なたちで1つの値を限定するカテゴリーになっていると考えられる。N2を隠喩として解釈するためのパラメーターとしてN1が機能しており、統語的に主要部後置型であるようにみえるが、つぎのテストから分かるように対比的な関係をつくって主要部を削除することができない。

- (28) *牛のミルクは好きだが、海_φは苦手だ。

また、主要部同格型や主要部倒置型に分類することもできない。なぜなら、「バター」は「森」に内在する性格ではないし、「バターの森」のように倒置することもできないからである。

4.2.2. パラメーターつきの提喩

つぎに、パラメーターつきの提喩についてのべる。この類型に該当する例としてつぎのようなものをあげることができる。

- (29) 浪速のモーツァルト／紀州のドンファン／韓国のキムタク／下町のナポリオン／東洋のカスバ／1986年のマリリン／21世紀の裕次郎／第2の安倍総理／令和のキャッツアイ／お年寄りの原宿／大人の事情

この類型は認知操作がやや複雑で、つぎのような段階をふむ。

- (30) a. 提喩により、固有名詞であるN2が普通名詞化する（ただし、「大人の事情」のようなN2が固有名詞ではない場合もある）。
b. 普通名詞化したN2を限定するパラメーターとしてN1が付与されることで、名詞句全体としてあらたな対象を指示する。

この類型で使用されるパラメーターは場所（e.g. 浪速、紀州、韓国、etc.）以外にも、時間（e.g. 1986年、21世紀、令和、etc.）、序数・順序（e.g. もうひとつ、第2、次世代、etc.）、信念をあらわす代名詞（e.g. 自分（「複合して生じるもの」参照））、年齢（e.g. お年寄り、大人、etc.）などがある。この類型は名詞句全体で単一の値を限定するので対比テストがつくりにくい、隠喩のばあいとはことなり、対比的な関係をつくって主要部を削除できないわけではない。したがって、統語的には主要部後置型であると考えられる。

- (31) 韓国のキムタクはウォンビンだが、台湾のqも2007年にいたらしい。

4.2.3. パラメーターつきの換喩

最後に、パラメーターつきの換喩についてのべる。ここまでの隠喩や提喩の類型にしたがうと、換喩でもパラメーターつきのものをつくることができそうだが、換喩による普通名詞化からの限定が同時にかかるようにおもわれる。この類型にかんしては、複数の比喩をふくむ例についてのべる際にあらためて分析する。

- (32) 夜の街／自分の相撲／第2の広島

4.3. N1とN2が比喩の関係をメタ的にしめすもの

この類型は、N1やN2の位置に比喩が生じるものではない。比喩の概念構造をN1とN2がメタ的にしめすものである。概念構造には、隠喩の類似関係、提喩のプロトタイプカテゴリーが介在したカテゴリーの包摂関係、換喩の隣（近）接関係がある。

4.3.1. N1とN2が隠喩の概念構造をメタ的にしめすもの

まず、N1とN2が隠喩の概念構造をメタ的にしめすものについてのべる。(以下、メタ隠喩型とよぶ)。

(33) 人生の旅／恋の病／笑のさざなみ／怪物の松井、etc.

メタ隠喩タイプの“N1とN2”型名詞句にはある種の「ねじれ現象」がみられる。これは、措定文と隠喩の概念構造をメタ的にあらわすコピュラ文（以下、便宜的に隠喩文と呼ぶ）の比較からあきらかになる。措定文（西山 2003）と隠喩文は、ある主題に対して述語名詞が何らかの属性付与をおこなう点において同じ構造をしているようにみえる。

(34) a. 太郎は学生である [措定文]

b. 人生は旅である [隠喩文]

しかし、両者を“N1のN2”型名詞句との関係から比較したばあい、隠喩表現のがわにねじれが生じる。措定文は、益岡・田窪（1992）のいう、「の」が判定詞「である」の連体形に由来する“N1のN2”型名詞句と連続性があり、この配列に変形することができる。

(35) 太郎は学生である → 学生である太郎 → 学生の太郎

これに対し、「人生の旅」「恋の病」「笑のさざなみ」のようなメタ隠喩型の名詞句はこのような変形からつくることができない。

(36) 人生は旅である → ? 旅である人生 → ? 旅の人生

この例では、隠喩文を“N1のN2”型名詞句に変形する操作をおこなうと、起点領域と目標領域の関係が反転してしまい、隠喩が成立しなくなる（〈旅ばかりの人生〉のような意味の名詞句になる）。すなわち、カテゴリーベースでみたばあい、措定文と隠喩文とは、N1とN2の包摂関係が逆転しているのである。

(37) a. 学生_{N1}の太郎_{N2} → 太郎_{N2}は学生_{N1}である [N2 ⊂ N1]

b. 人生_{N1}の旅_{N2} → 人生_{N1}は旅_{N2}である [N1 ⊂ N2]

このねじれをあしがかりにメタ隠喩型の特性をあきらかにしたい。まず、以下の例を三宅（2011）にもとづくテストフレームでふるいにかけ、統語的にどの主要部タイプにわかれるかを観察する。

(38) 蒸し風呂の暑さ／人生の旅／恋の病／笑のさざなみ／怪物の松井

まず、これらの例は「主要部後置型」ではない。

(39) a. *今年も京都は蒸し風呂の暑さだが、埼玉は地獄のφだ。

b. *人生の旅は困難を伴うが、死出のφは悲しみを伴う。

c. *ゲートは恋の病に悩んだが、国家のφにも没頭した。

d. *海のさざ波には触れられるが、笑のφは触れられない。

e. *怪物の松井 (= 松井秀喜) はヤンキースで活躍したが、リトルのφ (= 松井稼頭央) はメッツで低迷した。

さらに、名詞の位置を倒置できるものとできないものがあり、主要部同格型と主要部倒置型に分かれる。

- (40) a. 恋の病 → *病の恋
b. 人生の旅 → ?旅の人生
c. 蒸し風呂の暑さ → ?暑さの蒸し風呂
d. 笑のさざなみ → さざなみの笑
e. 怪物の松井 → 松井の怪物

ところで、倒置できる例には、「倒置すると表現としては成立するが、名詞句全体の意味や指示対象が変わってしまうもの」(e.g. 人生の旅、蒸し風呂の暑さ)と、「倒置しても名詞句全体の指示対象がかわらないもの」(e.g. 笑のさざなみ、怪物の松井)がある。先にのべたように、「人生の旅」を倒置した「旅の人生」は、〈旅ばかりの人生〉をあらわす。また、「蒸し風呂の暑さ」を倒置した「暑さの蒸し風呂」は〈非常に蒸し暑い場所〉をあらわし、もとの名詞句とはことなる対象を指示している。よって、これらの例は主要部倒置型の要件からはずれるので、主要部同格型としてあつかう。一方、「笑のさざなみ→さざなみの笑」、「怪物の松井→松井の怪物」は、倒置しても名詞句全体の指示対象がかわらないので主要部倒置型とみなせる。このように、三宅(2011)のテストにしたがえば統語的な主要部の区別がなくなるものと(=主要部同格型)、主要部が倒置するもの(=主要部倒置型)が存在し、メタ隠喩タイプの“N1のN2”型名詞句がこれに該当することをみた。

以上、統語的な主要部の観点からメタ隠喩タイプの“N1のN2”型名詞句について分析をおこなったが、ここまでの分析でみえてきたことは、統語構造の観点だけではメタ隠喩型の特性がつまびらかにならない、ということである。そこで、隠喩の概念構造の観点から、このタイプの名詞句の特性をさらに分析する。N1とN2を隠喩の概念構造である、起点領域(i.e. ソース。Sでしめす)と目標領域(i.e. ターゲット。Tでしめす)の区別から整理すると、各用法におけるくみあわせはつぎのようになる。

- (41) a. 人生の旅 [T + S]
b. 恋の病 [T + S]
c. 笑のさざなみ [T + S]
d. 蒸し風呂の暑さ [S + T]

e. 怪物の松井 [S + T]

T + SタイプとS + Tタイプは「の」を指定辞「という」にかえられるかで区別できる。

(42) a. 人生という旅 [T + S ; 主要部同格型]

b. 恋という病 [T + S ; 主要部同格型]

c. 笑というさざなみ [T + S ; 主要部倒置型]

d. *蒸し風呂という暑さ [S + T ; 主要部同格型]

e. *怪物という松井 [S + T ; 主要部倒置型]

このテストにもちいた指定辞「という」は、益岡 (1994) や多門 (2014) が、

(43) トイウ内容節の名詞修飾表現においては、被修飾名詞が内容節の属する範疇を表すということになる。(……) トイウ内容節の表現における被修飾名詞は、構造的には主要素であっても、意味的にはむしろ副次的な要素として機能すると見るべきである。すなわち、この場合、情報の中心は内容節の方にある、被修飾名詞はその内容節がどの範疇に属するかの情報を付加する働きをする、ということができる。

(益岡 1994 : 14-5)

(44) 「X トイウ Y」名詞句の統語論的な主名詞はYです。主節の述部はYに見合い、またYの位置に「もの」「こと」「の」といった形式名詞が入り、形式名詞も構造上その位置に必要なからこそ、保持され、まとまりで助辞的表現を形成するようになる。／一方、(14) の書名をみると、著作の主眼はすべて「X という Y」のXのほうです。

(多門 2014 : 25)

と指摘するように、「統語構造における主要部」と「意味的な主要素、情報の中心」をわける機能をもつ。メタ隠喩タイプの“N1のN2”型名詞句でT+Sの配列になっているもの(e.g. 人生の旅、笑のさざなみ)は、統語的には主要部同格型と主要部倒置型があり、主要部同格型は統語的な主要部が不透明だが、意味的な中心は目標領域の概念をあらわすN1にくる。また、主要部倒置型は目標領域の概念をあらわすN1で統語的な主要部と意味的な中心が一致する。メタ隠喩タイプの“N1のN2”型名詞句でS+Tの配列になっているもの(e.g. 蒸し風呂の暑さ)は主要部同格型なので統語的な主要部は不透明だが、意味的な中心は目標領域の概念をあらわすN2の位置にくる。ちなみに、“N1のN2”型名詞句で措定文に対応するもの(e.g. 学生の太郎)は統語構造における主要部と意味的な中心がN2の位置にくる。以上のことから、「人生の旅／笑のさざなみ」と「学生の太郎」のあいだにあるねじれは、統語的な主要部と意味的な中心が名詞句内のN1とN2のどちらで一致するかや、定まらな

いことに由来していると考えられる。

4.3.2. N1とN2が提喩の関係をメタ的にしめすもの

つぎに、N1とN2が提喩の関係をメタ的にしめすものについてのべる。この類型に該当するものとして以下の例をあげることができる。

(45) 引っ越しの日通／目玉のまっつあん／鼻のシラノ

これらは西山（2013）が指摘した「NP1（メルクマール）のNP2（指示的名詞句）」に該当するが、比喩の観点から精査する必要がある。この類型は任意の名詞に提喩が生じるわけではなく、N1とN2における提喩的な関係をメタ的に示すものである。すなわち、N1があらわすカテゴリーの典型例としてN2を標示する。ただし、N1の「引っ越し」「目玉」「鼻」は換喩属性であり、N1とN2が提喩の特徴であるカテゴリーの包摂関係にもなっていないので。全体としては、提喩と換喩が複合した例と考えられる（後述）。この類型は三宅（2011）がしめした統語的な3分類のどれにも属さず、名詞句が分析不可能なかたちで1つの値を限定するカテゴリーになっているものと考えられる。N1がN2（固有名詞）を非制限的に修飾しているが、N1とN2のむすびつきが提喩的關係にもとづく固定した組みあわせになっており、対比関係を作って一方の主要部を削除することがむずかしいので主要部後置型にはあたらない。また、N1に内在する性格をN2で明示するわけでもないので主要部同格型でもない。倒置ができないので主要部倒置型でもない。

4.3.3. N1とN2が換喩の関係をメタ的にしめすもの

つぎに、N1とN2が換喩の関係をメタ的にしめすものについてのべる。この類型に該当するものとして以下の例をあげることができるが、これらの例はあくまで関係性が換喩的なものであり、任意の名詞の位置に換喩が生じているわけではない。

(46) うな重の客、コンドルのジョー、青いターバンの少女、etc.

これらの例ではN1とN2が換喩によって指示し指示されるカテゴリーになっており、N2を主題としN1を述語とした、いわゆるウナギ文をつくることができる。

(47) この客はうな重だ。

この類型はつぎのテストからわかるように、統語的には主要部後置型である。

(48) うな重の客は金をはらったが、カツ丼のqはくいにげした。

これは一見奇妙な文にもみえるが、『銭形平次』に「三の輪の」（＝三の輪の万七親分）というあだ名の人物がいることから可能な形式であると考えられる。

4.4. 複数の比喩をふくむ“N1のN2”型名詞句について

最後に、複数の比喩が“N1のN2”型名詞句に生じているものとして以下の例をあげる。

(49) a. フジヤマのトビウオ

b. 夜の街

c. 自分の相撲

d. 第2の広島

e. 引っ越しの日通／目玉のまっつあん／鼻のシラノ（＝（45）再掲）

(49a) は名詞句全体としては4.2.1の「パラメーターつきの隠喩」タイプだが、N1の位置に換喩が生じている。(49b) はN2の位置に換喩が生じ（街→その街にある店）、さらにN1「夜」がパラメーターとしてはたらくことで提喩が生じ〈接待をとまなう飲食店〉への限定が生じている。(49c) はN2の位置に換喩が生じ（相撲→相撲のとりくみ）、さらにN1「自分」がパラメーターとしてはたらくことで提喩が生じ〈相撲のとりくみのなかでも自分にとって満足のいくとりくみ〉への限定が生じている。(49d) はN2「広島」が換喩によって「広島原爆投下にとまなう惨劇」を指示しているのだが、同時に提喩による固有名詞の普通名詞化が生じ、そこにN1「第2」がパラメーターとして限定修飾されることで、名詞句全体として〈広島原爆投下につづく、それと同様の惨劇〉を意味している。(49e) はさきにのべたとおり、名詞句全体としては提喩関係をメタ的に標示するものだが、N1が換喩の属性もそなえているものである。

このように、“N1のN2”型名詞句は複数の比喩が生じることによって、単純な形式に複雑な意味が与えられている。

4.5. メンタル・スペース理論による定式化

以上、隠喩・提喩・換喩（およびそれらが複合的に生じるもの）などの比喩が介在した“N1のN2”型名詞句の特性について分析をおこなった。ここからは、これまでの分析をもとに、メンタル・スペース理論をもちいてこのタイプの名詞句の解釈や指示のメカニズムについて定式化をおこなう。これにさきだつ分析として、井元（1995）は“N1のN2”型名詞句について、名詞句全体が役割となって何らかの値を限定すると考えているようである。これはたとえばつぎのように定式化できる。

(50) アメリカの大統領（2020）＝ドナルド・トランプ

一方、比喩が介在した“N1のN2”型名詞句による指示や解釈のメカニズムは、名

詞句全体を役割関数として処理すると類型間の差異がみえなくなってしまうように思われる。したがって以下では語用論的コネクターのはたらきをふくめた定式化をおこない、この種の名詞句を解釈するさいに生じる認知操作のちがいをあきらかにしたい。

4.5.1. 隠喩タイプの定式化

まず隠喩タイプについて定式化をおこなう。役割関数とアクセス原理をもとに隠喩による名詞句の指示を定式化するとつぎのように表示できる。

$$(51) F_{\text{隠喩}}(r1, I) = r2(M)$$

このとき、隠喩を生じさせる語用論的コネクターを「 $F_{\text{隠喩}}$ 」と表現しておく。このコネクターの内部構造は概念メタファーにおける起点領域から目標領域への属性の部分的写像構造である。これにより、任意の現場スペースMで話題になっているカテゴリ-r2の指示対象（これは目標領域に属している）を、起点領域に属するスペースI（= Imaginary、隠喩使用にかかわる話し手の信念スペースとしておく）におかれたカテゴリ-r1でもって指示することが可能となる⁽³⁾。この式をもとに、隠喩がふくまれる“N1のN2”型名詞句のそれぞれのタイプのちがいを定式化する。まず、「N1またはN2の位置に他方の名詞とは無関係に隠喩が生じるもの」はN1またはN2の位置に定式がそのまま適用される。たとえば「ママの雷」ならば以下ようになる。

$$(52) F_{\text{隠喩}}(\text{雷}, I) = \text{怒鳴り声}(M)$$

つぎに「目標領域のパラメーター+起点領域のカテゴリになっているもの」はカテゴリ-r2が保持しているフレーム情報からとりだされた情報がN1となり、r1がN2となる。定式にN1がパラメーターとして代入されることによって指示が完成する。たとえば、「海のミルク」ならば以下ようになる（図4も参照）。

$$(53) F_{\text{隠喩}}(\text{ミルク}, I, \text{海}) = \text{牡蠣}(M)$$

最後に「隠喩の概念構造をメタ的に示すもの」は「T+Sタイプ」と「S+Tタイプ」があったが、「T+Sタイプ」（e.g. 笑のさざなみ）も「S+Tタイプ」（e.g. さざなみの笑）も定式化はおなじであり、この関係を名詞句に反映させるときに、2つの構造にわかれるものと考えられる（図5も参照）。

$$(54) F_{\text{隠喩}}(\text{さざなみ}, I) = \text{笑}(M) \text{ [Mは物語内の現場]}$$

4.5.2. 提喩タイプの定式化

つぎに提喩タイプの定式化をおこなう。提喩はカテゴリの外延を伸縮させる認知操作である。これを語用論的コネクター「 $F_{\text{提喩}}$ 」とするとつぎのような定式にな

る。このとき、 r_1 と r_2 は包摂関係になり、この特徴がカテゴリーの関係性からみればあい、隠喩および換喩と提喩とのおおきなちがいがいとなる。

$$(55) F_{\text{提喩}}(r_1, M) = r_2(M)$$

「 $F_{\text{提喩}}$ 」には外延が縮小するタイプと伸張するタイプがある。「空から白いものが降ってきた」のような例が外延が縮小するタイプである。定式化するとつぎのようになり、スペースMは雪が降ってくるような空模様や気温になっている現場である。

$$(56) F_{\text{提喩}}(\text{白いもの}, M) = \text{雪}(M)$$

また、外延が伸張するタイプは、「ご飯」が食べもの全般をあらわすような、プロトタイプカテゴリーが上位カテゴリーと同値になる例や、固有名詞が普通名詞化する例である。これを「モーツァルト」で代表させると、つぎのような定式になる。

(57) $F_{\text{提喩}}(\text{モーツァルト}, M) = \text{モーツァルトの特徴を部分的に保持する人}(M)$
メンタル・スペース理論では固有名詞をいかなるスペースにおかれても単一の値を指示するカテゴリーととらえるが、普通名詞化した「モーツァルト」はその機能をうしない、モーツァルトの特徴を部分的に保持した人物という集合をあらわすようになる。3つのタイプのうち、「N1またはN2の位置に他方の名詞とは無関係に提喩が生じるもの」はこのような規則や尺度含意にもとづいてカテゴリー化が定着した語であると考えられる。また、「N1とN2が提喩の関係をメタ的にしめすもの」における「関係」は外延を縮小する定式にもとづくものであると考えられる。さらに、「パラメーターつきの提喩」については、(57)の定式のスペースMに任意のパラメーターを代入することで、あらたな値が限定される。たとえば、名詞句「浪速のモーツァルト」は、キダタローを指示するために、固有名詞「キダタロー」に登録されている属性 (i.e. 浪速を代表する作曲家である) の一部がN1としてとりだされる。この属性がスペースのパラメーターとして (57) に代入されることで、キダタローへの指示が完成する (図2も参照)。

$$(58) F_{\text{提喩}}(\text{モーツァルト}, \text{浪速}) = \text{キダタロー}(\text{浪速})$$

4.5.3. 換喩タイプの定式化

最後に換喩タイプの定式化をおこなう。まず、換喩による指示はつぎのように定式化される。これはある現場スペースMに存在するカテゴリー r_1 と r_2 が語用論的コネクターで接続されているとき、 r_2 の値を r_1 で指示できることをしめしている。

$$(59) F_{\text{換喩}}(r_1, M) = r_2(M)$$

換喩がふくまれる“N1のN2”型名詞句には「N1またはN2の位置に他方の名詞とは無関係に換喩が生じるもの」「パラメーターつきの換喩」「N1とN2が換喩の関係

をメタ的にしめすもの」があった。まず、他方の名詞と無関係に換喩が生じるものについては、この定式がそのまま適用される。たとえば「メガネの弟」ならば、以下のとおりである（図3も参照）。

(60) $F_{\text{換喩}}$ (メガネ, M) = 某 (M)

つぎに、パラメーターつきの換喩についてであるが、このばあいのパラメーターは、この類型で同時に生じている提喩に作用するものである。この部分についての定式は提喩のものが適用される。また、換喩の部分については(59)の定式をそのまま適用することができる。最後に、換喩の関係をメタ的にしめすものは(e.g. うな重の客)、N1がr1をあらわし、N2がr2をあらわす。そこになんらかの文脈的な限定がかかることで名詞句全体として特定の値を限定するものと考えられる。

5. おわりに

本稿は比喩が介在する“N1のN2”型名詞句について以下のことをのべた。

- (61) a. 隠喩タイプ・提喩タイプ・換喩タイプともに、名詞句内のある名詞がもう一方の名詞と無関係に比喩表現になるサブタイプをもつ。この類型は、統語的には主要部後置型である。
- b. 隠喩タイプや提喩タイプは、N1が名詞句全体の指示対象に関連するパラメーターをあらわし、N2を限定修飾するサブタイプをもつ。この類型は、隠喩タイプにかんしては統語的には名詞句が一体となっていてどの統語タイプにも属さない。また、提喩タイプにかんしては主要部後置型である。換喩でもこのタイプをつくることができるが、提喩による限定が同時にかかる。
- c. 隠喩タイプ・提喩タイプ・換喩タイプともに、比喩の概念構造をメタ的にしめすサブタイプをもつ。統語的には隠喩タイプは主要部同格型か主要部倒置型である。提喩タイプは提喩関係による固定化により名詞句が一体となるため、どの統語タイプにも属さない。換喩タイプは主要部後置型である。
- d. 以上の類型がおこなう認知操作はアクセス原理によって定式化できる。

図版

M: アメリカ、2020年



図 1 : 役割関数

M: 浪速

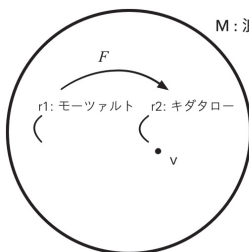


図 2 : パラメーターつきの提喩

M

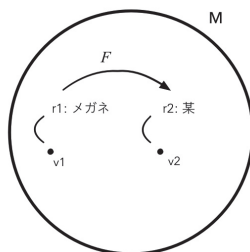


図 3 : 換喩

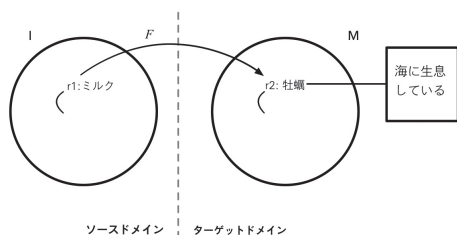


図 4 : パラメーターつきの隠喩

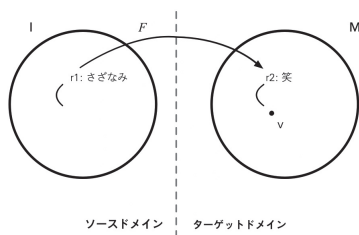


図 5 : メタ隠喩型

注

- (1) 「太郎のおにいちゃん」のような主要部同格型の例は、「おにいちゃんの太郎」のように倒置することができるが、倒置したものがたまたま主要部後置型として解釈できるだけであろう。
- (2) 『男という猫を飼う』、『ピアニストという蜜族がいる』、『『つくる会』という運動がある』、『『反日』という甘えを断て』
- (3) 起点領域と目標領域という 2 つの異なる領域が設定され、それにあわせて 2 つの異なるスペースが設定されることが隠喩と提喩および換喩との大きなちがいである。

参考文献

- 井元秀剛 (1995): 「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』21, 97-117, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- (2006): 「コピュラ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」『シュンボシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』13-22, 朝日出版社.
- 佐藤信夫 (1978): 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく—』, 講談社.
- 鈴木康之 (1978): 「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ (1)」『教育国語』55, 12-24, むぎ書房.
- (1979a): 「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ (2)」『教育国語』56, 66-84, むぎ書房.

- (1979b) : 「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ (3)」『教育国語』58, 83 - 97, むぎ書房.
- (1979c) : 「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ (4)」『教育国語』59, 67 - 81, むぎ書房.
- (2006) : 「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ—鈴木康之・彭広陸・中野はるみの研究をふりかえって—」『ことばの科学』11, 49 - 62, むぎ書房.
- 多門靖容 (2014) : 『比喩論』, 風間書房.
- 東条佳奈 (2018) : 「「NP1の擬似数量詞」の分析—列举タイプ・非列举タイプの名詞句に注目して」, 土曜ことばの会 (2018年4月14日) 発表資料.
- 西山佑司 (2003) : 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房.
- 西山佑司 [編] (2013) : 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』, ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 [編] (2009) : 『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』, くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) : 『基礎日本語文法』, くろしお出版.
- 益岡隆志 (1994) : 「名詞修飾節の接続形式——内容節を中心に——」『日本語の名詞修飾表現』, 5-27, くろしお出版.
- 三宅知宏 (2011) : 『日本語研究のインターフェース』, くろしお出版.
- Fauconnier, G. (1985) : *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1997) : *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980): *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Lakoff, G. (1987): *Women, Fire and Dangerous Things What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Nunberg, G. (1978): *The Pragmatics of Reference*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.

用例出典

『紙の砦』(手塚治虫、1974年)、『野守鏡』(石川淳、1950年)

付記

本稿はJSPS科研費(課題番号:19K13205)の助成を受けたものである。

(おおたがき・さとし 近畿大学准教授)